

善照寺
寺報

ぜんしょうじ

第7号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺

電話 四七(三五七)二二三二

FAX 〇四七(三九七)一三三二

暑中お見舞い申し上げます

善照寺住職 今岡達雄

暑中お見舞い申し上げます。

善照寺の境内にはあちらこちらに紫陽花の花が咲いています。その花の色が褪せてくるとどうやら梅雨明けも間近のようです。寺の近くでは湊の水神様、湊新田の胡録神社のお祭りがあります。七月十三〜十五日



は東京地区のお盆です。この時期は梅雨が明けそうに明けない時期で、いつも空模様と相談しながらの傘の手放せない時期であります。

梅雨が明けますと本格的な夏がやってきます。皆様方の夏のイメージはどのようなものでしょうか。夏休み、海水浴、ゆかた、花火、甲子園等々色々なことを思い浮かべるでしょうが、善照寺の夏はなんと二大行事です。草取り、井戸替え、おみがき、墓掃除、塔婆書きなど全ての活動が「おぼん」

「おせがき」に向かって進んでいきます。暑さに負けず着々と準備を続けるところに、昔から続いてきた力を感じることが出来ました。

しかし、残念なことに昔と同じようには出来ないことも多くなりました。昔は「マコモ」や「ハス」の葉なんてどこにでもあったのですが今では手に入るのは大変です。「ミソハギ」は未だ寺にあります。いつもで続かわかりません。夏の冷房の普及率も高くなり隣の家の「おりん」の音もわずかにしか聞こえないようになってしまいました。昔とは生活環境も生活スタイルも変わってしまいました。だからこそ出来るだけ昔から行ってきたようにご供養をしたいものです。

暑さはこれから本番です。皆様が健やかに「おぼん」「おせがき」を迎えられますよう祈念致します。

南無阿弥陀仏

行事予定

平成十五年七月〜九月の善照寺の年間行事の予定です。皆様方是非ともお参り下さい。

お盆(おぼん)

東京地区

棚経 (七月十三〜五日)

お迎え (七月十三日)

お送り (七月十五日)

地元地区

棚経 (八月十三〜五日)

お迎え (八月十三日)

お送り (八月十五日)

新盆

自宅での新盆供養

東京 (七月十三〜十五日)

地元 (八月一日〜二十五日)

新盆供養(施餓鬼に併修)

施餓鬼会 八月十七日(日)

一時 法話

二時 法要

お彼岸秋

九月二十日〜二十六日

住職法話

おぼん・おせがきの話 はなし

例年、夏になると「おぼん」「おせがき」の供養が行われます。そもそもお釈迦様のお話では『孟蘭盆(うらぼん)』は餓鬼道に落ちた目連尊者のお母様の供養のお話ですし、『施餓鬼(せがき)』は阿難尊者が餓鬼道にいる鬼達の供養を行ったお話し。

これらの話に共通するのは餓鬼供養です。餓鬼に食べ物を通して餓鬼世界から救う「施餓鬼供養」の功德はとても大きく、餓鬼を救うのみならず願主の寿命がのびたり、先祖の供養にも最良の方法なのです。

餓鬼とは

ところで餓鬼はなぜいつでも腹を空かせているのでしょうか、それには訳があります。

餓鬼世界では食べ物を口に入れようとすると、燃えて炭になってしまいます。かりに食べ物を口にしても、喉が針のように細いので飲みこむことができません。高所恐怖症で地上から1メートル以上のところにある食べ物も取れません。明るい所にめっぽう弱く、薄暗いところを好んで食べ物を探しまわります。

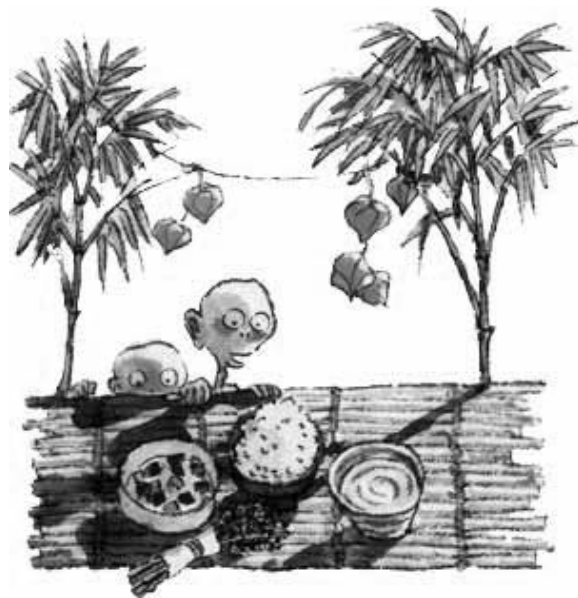
高所恐怖症で地上から1メートル以上のところにある食べ物も取れません。明るい所にめっぽう弱く、薄暗いところを好んで食べ物を探しまわります。

餓鬼の救い方

では餓鬼はどのような方法で救えるのでしょうか。『焰口餓鬼陀羅尼経(えんくがきだらにきょう)』というお経にその方法が書かれています。

まず、餓鬼を私たちの世界に呼ぶのに竹や笹で日かげを作ります。これは餓鬼が明るいところに弱いからです。次に餓鬼は

高所恐怖症ですから食べ物を取りやすいようになるべく低い所に食事場所(精霊棚)を用意します。食べ物には喉が針のように細いので、喉を通るようになるべく



えながらミソハギで水を振りかけます。このようにして餓鬼が食べ物を食べられるようにするのが、これが餓鬼供養法(餓鬼の救い方)なのです。

お盆は自宅で、施餓鬼は寺で

「おぼん」には皆様の家に精霊棚を作ります。そこに僧侶がお伺いして施餓鬼供養法を行います。これが棚経です。「おせがき」には本堂の外縁に精霊棚を作り、大勢の僧侶を集めて施餓鬼供養法を行います。

有縁霊も、無縁霊も施餓鬼供養法によって最高の供養が行われるのです。ここには縁のない霊、自分には直接関連のない霊にも布施供養をするという仏教における最も重要な考え方が含まれているのです。

最高の功德のために皆様方も是非とも「おぼん」「おせがき」にご参加ください。

(住職 達雄)

細かくしておきます。夏なら旬のナスとキュウリを細かく切つて、それにお米をまぜておきます。そして、口に入れようとすると燃えてしまいますから、呪文つまり陀羅尼(だらに)を唱



もつひとつのおせがき

「仏に往生させてもらう絶対の確信ができたならば、お念仏以外の行いも仏に結びついてくる」(法然上人『十二問答』)



あるとき、お釈迦さまの弟子阿難がいつものように修行をしていると、目の前に一匹の餓鬼(がき)があらわれて、口から炎を吐きながら言いました。「おまえは三日後に死んで、苦しい餓鬼の世界に落ちるぞ」
ちよつと聞くと、おとき話のような不思議な世界です。ですが仏教のお話ですから、隠された意味があるはずですよ。



餓鬼(がき)

阿難は気づいたのだと思えます。自分の中の餓えた鬼、むさぼりの心が、いくらいくら修行しても、消えないことに。阿難の前にあらわれた餓鬼とは、その固い固い確信です。

自分はこれまでずっと、それにこれからも、むさぼりの心からは離れられない。そんな自分は将来必ず、その報いを受けなければならぬいだらう…

どうすればよいかたずねると、餓鬼はこたえました。「俺たち恵まれない餓鬼に、ほどこしをしてくれ」

自分の中の餓えた鬼は、阿難のように修行によって消そう消そうとしても、決して消えないのです。言われるようにするかありません。

仏さまからの手紙

ところが、餓鬼がものを食べようとすると、その口から吹き出す炎によって、食べる前にすべて焼きつくされてしまうのでした。

むさぼりの心にただ従っていても、ますます欲望が肥大します。いつまでも満腹になることはないのです。

餓鬼にさからって修行をしてもだめ。餓鬼の言うままに従ってもだめ。困りはてた阿難は、お釈迦さまのところへ教えを乞いにいきました。

お釈迦さまは阿難に教えました。「その餓鬼は、ただ食べ物が必要としているのではない。食べ物ばかりをめぐんでもだめだ。仏さまの心をめぐんでやりなさい」

この世界は、むさぼりの心をはじめ、悪い心や悪いおこないの報いを受けて苦しみつづける世界です。そこからは、自力の修行をいくら積んでも、抜け出

すことはできないのです。

そうではなくて、すべてを超えたただ一人のお方、仏さまの大いなる力が必要なのです。

阿難はほどこし物を用意して、あわせて仏さまに供養しました。餓鬼たちも一緒に仏さまを拝みました。それによって阿難の命は延び、餓鬼の苦しみもやんだのです。

我が心には、むさぼりの心がやみません。それだからこそ仏はあわれみの心をおこして、救いの手をさしのべています。

三日で死ぬはずだった阿難は、仏の大いなる心の中で自分が生き続けることに気がつきました。またみ仏の力のはたらきによって、その餓鬼の心は、自分にめぐまれた物だけで満足できるようになったのでした。

冒頭の法然上人のおことば。この物語から味わうことができるでしょうか。

(副住職 達彦)

お寺との付き合い

お墓掃除と盆棚(十二日)

「おぼん」の前にお墓の掃除をします。昔はお盆前の十二日が掃除日で朝早くからお掃除に來られました。お墓の掃除をして、お墓におぼんの供え物を飾り付けました。ナスやキュウリなど腐りやすい物を供えるので、おぼん前日が掃除日だったようです。現在は墓前の供え物は衛生上の問題から行いません。ですから早めにお墓掃除に來られる方もおられます。

自宅の仏壇前に盆棚(精霊棚)を作ります。マコモを敷き、お位牌を安置し、五穀を供え、線香、ローソク、花をお供えします。

お盆の付け届け

お盆の付け届けとは寺への「お中元」です。包み物で平均で五千円程度、お近くの方は十二日墓掃除の時、遠方の方は寺に來られたときに届けるようです。別に墓地の掃除代二千円もお納め下さい。

棚経(十三、十五日)

僧侶がお伺いして盆棚(精霊棚)で餓鬼供養をします。私共は一日に百軒以上のご供養をしますのでゆっくり出来ません。飲食等のご接待はお気持ちだけで結構です。僧侶へのお布施ですが、行徳の昔の習慣では、仏壇には手間賃を置き、僧侶へのお布施は盆札として日を改めて寺に届けたようです。現代生活は忙しいので、最近ではあらためて盆札される方は少なくなりました。

仏壇あるいは盆棚に「お布施」あるいは「盆札」として三、五千円を包んで置いておいて下さい。

お迎え(十三日)

先祖代々諸霊、先亡霊位、新盆霊位をお迎えします。寺の近くの方は提灯を持ってお墓までお迎えにいらつしやいます。棚経とは関係なくお迎え下さい。棚経は食べ物や清める儀式ですから、諸霊をお迎えする前でも後でも出来ません。本来は夕方にお迎えします。

中日(十四日)

先祖代々諸霊、先亡霊位、新盆霊位と共に過ごす日です。食べ物をお供えし、ミソハギで水を振りかけるのが正しい方法です。

お送り(十五日)

善照寺のお送り日は十五日です。十六日の地域もありますが行徳では十五日になっています。午後にお送りします。お送りした後にお墓に線香をあげ、合掌して祈念します。

おせがき(十七日)

「おせがき」は餓鬼供養のための法要ですが、これに併せてお塔婆をあげ先祖や先亡諸霊の供養を行います。お塔婆の申込みは遅くとも十二日までにお願ひします。お塔婆は一基四千円です。これとは別に施餓鬼供養のためのお布施を包んで下さい。平均五千円程度です。「お布施」あるいは「施餓鬼供養料」とお書きになって下さい。(合掌)

編集後記

お盆は私たちを養い育ててくださった両親やご先祖への感謝の日でもあります。子孫の元気な姿を、お浄土からお迎えした先祖にみせて安心していただき、その霊に供養して、生けるもの、死せるものが一つに融けあう生命の触れあいの場と言えます。こういった日本のお盆にあたるものが外国にも見受けられます。

西欧では十月三十一日はハロウィンで、お化けの扮装をして遊ぶ子どもの祭りとなっています。ハロウィンは古代ケルト民族の暦で新年の前日にあたり、この夜に土がゆるみ、死者の霊が生家に戻ってくるという言い伝えのある行事です。お隣の韓国では八月十五日を秋夕(チュソク)、また嘉俳(カユイ)といい、先祖の墓参りが行われます。この他にもタイやカンボジア、中国などに見出されます。人の心は万国通ずるものがあるのですね。

(副住職室 久美英)